



画期的な新薬!? インクレチン関連薬

最近、テレビや新聞で夢のような糖尿病薬が開発されたと話題になっているのが**インクレチン関連薬**です。この機会に解説いたします。

インクレチンとは食べ物が消化管で消化吸収される際に消化管から分泌されるホルモンの1種です。インクレチンは血液を介して膵臓に運ばれて、膵臓からのインスリン分泌を増強する働きを持ちます。都合良いことに、インクレチンは血糖が高い時だけインスリン分泌を促進し、血糖が低い時にはインスリンを出しません。つまり、インクレチンを糖尿病治療に使っても、**低血糖が起こりにくい**わけです。更に、インクレチンには膵臓でインスリンを産生している**ベータ細胞を保護したり増やしたりする**可能性が期待されています。徐々にベータ細胞の機能が低下する

糖尿病患者さんにとって、ベータ細胞を元気にできるかもしれないといわれているインクレチン関連薬はとても魅力的です。

インクレチン関連薬には、インクレチンそのものをお薬に適した形に変化させた**注射薬**（ビクトーザ・バイエッタ）と、体の中でインクレチンの分解を抑制する**内服薬**（ジャヌビア・グラクティブ・エクア・ネシーナ）があります。

とても魅力的な薬ですが、やはりコントロールが悪い糖尿病患者さんには効果が不十分なことも多いようです。また、発売されて1年の新薬ですから、長期の安全性やヒトにおけるベータ細胞保護効果などはまだ未知数です。糖尿病を治癒させる夢の薬ではありませんが、上手に利用すれば大きな武器になるでしょう。

HbA1c（ヘモグロビンA1c）の国際標準化

HbA1c（ヘモグロビンA1c）は外来で糖尿病患者さんの血糖コントロール状態を評価するときにもよく利用される検査です。血糖は食事の前後で大きく変動しますので、1回の血糖値の検査で血糖コントロールが良いか悪いかを判断することは困難です。そこでHbA1cという検査が開発されました。HbA1cは食事の前後で変動することはなく、過去1～2か月の血糖の平均値とよい相関を示します。このため、1回の採血検査でその患者さんの最近の血糖コントロール状態がよくわかります。例えば、血糖コントロールが良好と判断できるのはHbA1cが6.4%以下の時であり、この値が達成できれば糖尿病網膜症の発症・進展が防止できる

といわれています。とても便利なHbA1cですが、実は測定基準の差から日本のHbA1cと諸外国で使われているHbA1cの**国際標準値**の間に0.4%の差があることが判明してきました。例えば日本で6.4%と判断された同じ検体を外国で測定していただくと、6.8%と日本の値より0.4%高い値になるのです。同じ物を測りながら国によって値が違うことは、この国際化の世の中で不都合なことです。このため、日本糖尿病学会では、日本でも将来は国際標準値に移行することを決めました。これを**HbA1cの国際標準化**と呼びます。患者さんに混乱が起こらないように、今後1～2年の移行期間が置かれています。皆さんも少し覚えておいてください。

明けましておめでとうございます！

お正月は糖尿病患者さんには1年で最も血糖が上がりやすい季節ですが、皆さんは大丈夫ですか？

おかげさまで当院は2008年1月に開院して今年で3周年を迎えます。これからも皆さんの健康を守り幸せな生活づくりに貢献していきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。



新年の1月4日、冬休み最後の日に家族で東京ディズニーランドに行ってきました。園内に1歩入るとそこは夢の国で

す。ディズニーキャラクター達のはじけるような笑顔でとても幸せな1日でした♡♡♡

笑顔は人を幸せにしてくれます。私も皆さんと笑顔でこの新しい年を迎えたいと思います。



2011年1月7日
院長 内田大学

栄養相談のお知らせ

昨年12月に行った栄養相談のアンケート調査、ご協力をいただいた患者さんにお礼申し上げます。その中で、多くの患者さんから、栄養相談を受けたいという希望がありました。当院では、毎日管理栄養士による栄養相談を実施しております。ご希望の患者さんはどうぞご遠慮されることなく、医師やスタッフにご相談ください。